

7月増刊号『歴史の授業は子どもが主役』「荘園の授業」の「なりきり」作文と小論文の事例紹介

この度発刊の7月増刊号で関誠さんが実践報告された「荘園の授業」で、紙面の都合上、紹介できなかった生徒の書いた作文と小論文をここに紹介します。

「なりきり」作文は、子どもが荘園にすむ農民になったつもりで、荘園での日々の生活について綴ったものです。小論文はその後のグループワークを経て書かれたものです。両者でどのような変化が見られたかに注目して、お読みください。ここではIさんの作品を例に紹介します。

Iさんの「なりきり」作文（田植えをする女性になりきって）

私は荘園に住んでいる農民です。荘園は山に囲まれています。五つのぼう示の中が荘園です。私たちは農耕をもとに暮らしています。働くのは女性です。男性たちは、歌をうたったりおどったりしています。少し手伝ってほしいです。でもそのおかげで、やっかいなものはどっかに行ってくれます。そして、私たちが作ったものはすべて私たちのものじゃありません。年貢として領主や荘官に納めます。持って行くのは男性なのでたよりになります。力仕事は男性の役目です。

Iさんの小論文（こちらも「なりきって」いる）

五つのぼう示内が荘園です。山に囲まれています。何故山に囲まれているのかというと果物やイノシシなどの動物をとりに行くためです。とったものは年貢として領主や荘官に納めます。荘園の約八割方は田んぼと畑です。田んぼではお米を作り、畑では麦や牛蒡、油などをつくっています。私たちはこの農耕をもとに暮らしています。でもお米の場合、つくった半分くらいは年貢として、領主や荘官に納めます。畑や田んぼが多いので、荘園は川にも囲まれています。

荘園の住人は昼間中ほぼ働いています。畑行ったり、田んぼに行ったり、山に行ったり川に行ったりしています。ずっと働くだけじゃつまらないので、田楽というので楽しみながら働いています。田楽でやっかいなものは近よって来ません。働くのは女性が多いです。男性たちはたまに手伝ってくれます。女性が働いている間男性たちは、田楽で楽しんでいます。また、年貢を納めに行っています。力仕事は男性がやってくれます。年貢として持って行くものは、すごく重いです。山の幸以外に、イノシシやシカの皮や布、魚も持って行きます。その際に辛いことがあります。それは、とっても遠いことです。都まで行きます。行きに三日、帰りに三日ぐらい約一週間もかかります。それと反対に楽しいことは何もありません。遠くて重いのは最悪なので、農民の人たちも持って行きたくないと思っていることなのでしょう。でも、領主や荘官がいるおかげで私たちは住めていると思ひ、しかたなく持っていつているのです。

では、年貢をもらっている領主や荘官はどう思っているのでしょうか。あたりまえですが、もらった年貢は自分たちが食べます。この人たちは、その年貢で暮らしています。

授業全体の展開については本誌を参照頂きたいと思いますが、関さんはこのIさんのように、「なりきり」作文と小論文とで、内容が「深まった」と認められた作品は、実に全体の八七パーセントにも及んだと評価されています。そして、今回のグループワークについて「グループワークという手法が、それだけの効用をもたらすのであろうか。実は、そ

うは容易く言えない。というのも、今回のグループ構成は、生活班など機械的な構成ではなく、生徒個々の性格や人間関係をベースに『しゃべりやすい』であろうグループ構成を模索してみたのである。であるから、グループワークという方法そのものの効用であったのか、それとも、グループづくりの考え方によるものであるのか、またその双方なのかは、現段階では解らない。」と述べられています。